

齟齬と和解

「んー、なんか違うんだよな」

青原梨沙はそう言って右後頭部をボリボリと掻き教室の天井を見上げる。と、歴史の田原先生と目が合う。どうやら声が聞こえていたようだ。とりあえず笑ってみると、先生は再び板書に移った。危ない。青原には今高度経済成長を学ぶよりやらなくてはいけないことがある。青原は来たる六月の文化祭に備えて公演予定の演劇部の脚本を考えていた。しかし、これが全く書けない。書いては消してを繰り返す。あれでもないしこれでもないし、休みの間に近所の図書館に籠ってみてもダメだった。一月半ばに生徒会から布告を受けてから気がつく和二週間が経つ。あー、もう、イラつく。青原以外の部員五人は全員演劇が好きだ。でも、やっぱり演劇のことを一番知っててリードしてはいけないのは青原だ。今までは自分の思うままに好きに脚本をかけたが、今回はプレッシャーが違う。タンタンと貧乏ゆすりが激しくなる。

「じゃあ今日はここまで。日直さん、号令。」

田原の掛け声にハッと目を覚ます。いつの間にか青原は右腕の二の腕を枕にして寝ていたようだ。食後なのもあるが、最近睡眠時間が短くなった。大きくあくびをする。ギロっと田原の大きな目がこちらを向く。また、笑ってみせたが田原の眉間の皺は依然深いまま。

青原は今にももう一度閉じそうな臉を必死に擦る。構想の進捗は未だゼロ。青原は切り替えて六限の準備に移った。

織山風はホームルームが終わると駆け足で別棟地下へと続く階段へ向かった。これまでにないほど風の頭は演劇のことでいっぱいだった。今日から今年も二月に突入して、本格的に演技の練習を始めるのだ。そうは言っても青原が脚本を書くのに難航しているみたいだから、今日は基礎練をがつりやる。青原に頼ってばかりいられない。風の腕には図書室で借りた分厚い演劇関係の本が二冊。確か七瀬とか千明も読みたいって言ってたから今日一緒に勉強しよう。

そうこう考えているうちに、別棟の地下教室が並ぶ廊下まで来ていた。本校舎のとはまるで違う雰囲気だ。薄暗くて昼でも夜でも明るさはいつも一緒。それはまあ地下だからしょうがないけど、なんと言っても寒くてボロい。極寒の二月くらいヒーターを使わせて欲しい。風は剥がれかけの、演劇部とマッキーで書かれた紙が貼られたドアを開けようとした。その時、

「もー、分かんねえよ！俺の演技ダメって言うけど具体的に何がダメなんだよ、まだまだ演技未熟なのわかってるけど否定され続けると嫌だわ。なんかもう、つまんない」

三浦の怒鳴り声なんて初めて聞いた。三浦は激しくドアを開け横にいた風には気付かずそのままどこかへ行ってしまった。

一体何があったのか。恐る恐る風は教室に入ると、青原が今にも泣き出しそうに目を充血させながらも、必死に堪えて黙って立っていた。そばにはオロオロと青原の様子を伺う千明と田中。深いため息をひとつする七瀬。

「い、一体何がどうしてこんなことに…?」

「…今日は三浦の演技練習に梨沙が付き合う約束してたのよね、三浦は特に演劇部の日が浅いから。で、三浦の演技の拙さをりさが徹底的に言ったの、でもそれがかつてない程のダメ出しのオンパレードで最初は三浦も受け入れてたんだけど、だんだん耐えられなくなって三浦は嫌になっちゃったってわけよ」

俯きながら田中と千明が頷く。

七瀬がそう説明するうちに青原の目には涙がたまり、ついに溢れてしまった。説明を受けて風は

「そっか、大変だったね、それははダメだし覚悟で青原と約束したのにうまくいかなくていじけた三浦がよくないんじゃないかな。三浦、連れ戻してくるよ」

「待って！」

青原がぐいっと風の手首を引っ張る。床に正座して時折ズビツと鼻を吸り、涙を浮かべながら話す。いつも活発な彼女とは思えない意外な姿を見て風は少し緊張していた。

「私、今さ、実はどんな演技が一番いいのかわからなくなっちゃたの：前はこんな演技が好きとかあったんだけど、本当にそれは自分の追い求めている演劇なのかなって：大好きな映画みたいにかっこいい脚本書かなきゃって焦っちゃって、何を求めているのか自分でもわからない。さっき三浦に言ったことも自分でもよく分かってない。ただ本に書いてあることを言っただけ。こんなの脚本家として、リーダーとして全然ダメ、自分が一番ダメだって知ってるの」

少しの間、沈黙が流れる。教室の薄暗さがさらに空気を重くする。埃を被ったたくさんの机、薄い壁、ボロい教室が浮きだって感じられる。青原ばかりに負担をかけすぎた。でも青原の代わりができるほど青原ほどの知識を持った部員はいない。生徒会が提示した条件の厳しさの一端を風たちは感じた。

「そ、そ、そんなの梨沙さんらしくないでしゅー！」

千明が囁みながらも、確かな声で言った。

「僕が、演劇部に誘われて間もない頃、梨沙さんは話したこともほとんどないような僕相手にも映画とか、脚本とか好きなものを話している時、楽しそうでキラキラしているのが梨沙さんです！完璧なものを求めるのも実に梨沙さんらしくていいですけど、それに囚われすぎないで梨沙さんの好きなものが、僕は、あの、す、好きです！！」

「俺も！あんま脚本の難しさとか分かんないけど、今までみたいな自由で梨沙らしい脚本、好きだよ」

田中も千明に続いて言う。

「梨沙、あんた今までの勝手わがままさ、どこ行っちゃったのよ。今こそ、その映画への情熱ぶりを発揮する時じゃない。梨沙は梨沙が一番だよ。三浦も今拗ねてるだけだと思うから、明日一緒に仲直りしにいきましょう」

励ますことに慣れていないのか、少しだけぎこちなく言った。

青山は右手の手の甲で両目をゴシゴシと拭う

「みんな、ありがとう。だいぶ元気出た。そうだね三浦ともちゃんと話して仲直りしたい」

青山はニカッと笑う。

ばんっ！

「ほえ！」

千明は大きな音に思わず声が出た。

突然教室のドアが開く。そこには、三浦がいた。

「みんな、あの勝手にいなくなってますませんでした。梨沙、あの、さっきは嫌とかつまんないとか色々教えてもらってる身なのに、勝手言ってますませんでした。俺、最近家でも自主練とか頑張ってたんですけど全然いつもより改善点多くて、悔しくて逃げました。あ、廊下ですっと話聞いてま

した。俺ももちろん梨沙の脚本がいいっす。これからも熱血指導大歓迎っす。なので、また今度、梨沙の都合がいい時に練習付き合ってもらえませんか？」

どうやら教室から出ていったあとすぐに戻ってきていたらしい。

「私もごめんね。さっきのは熱血っていうか私自身焦ってたのが原因だから。練習はもちろんいいよ！じゃあ、次の金曜で！」

凧と七瀬、千明、田中は顔を見合わせてにっこりと微笑んだ。